

ブドリのお父さんもお母さんも、たびたび薪たきぎを野原の方へ持って行ったり、冬になつてからは何べんも巨きな樹を町へそりで運んだりしたのですが、いつもがっかりしたようにして、わずかの麦の粉こななどもって帰ってくるのでした。それでもどうにかその冬は過ぎて次の春になり、畑には大切にしまつて置いた種子たねも播かれましたが、その年もまたすっかり前の年の通りでした。そして秋になると、とうとうほんとうの饑饉ききんになつてしまいました。もうそのころは学校へ来ることもありませんでした。ブドリのお父さんもお母さんも、すっかり仕事をやめていました。そしてたびたび心配そうに相談しては、かわるがわる町へ出て行って、やっとすこしばかりの黍きびの粒など持って帰ることもあれば、なんにも持たずに顔いろを悪くして帰ってくることもありました。そしてみんなは、こならの実(七六)や、葛くずやわらびの根や、木の柔やわらかな皮やいろんなものをたべて、その冬をすごしました。けれども春が来たころは、お父さんもお母さんも、何かひどい病気のようでした。

ある日お父さんは、じつと頭をかかえて、いつまでもいつまでも考えていましたが、俄にわかに起きあがって、

「おれは森へ行って遊んでくるぞ」と云いいながら、よろよろ家うちを出て行きましたが、

まっくらになつても帰つて来ませんでした。二人がお母さんにお父さんはどうしたろうときいても、お母さんはだまつて二人の顔を見ているばかりでした。

次の日の晩方になつて、森がもう黒く見えるころ、お母さんは俄かに立って、炉ろに櫛ほだをたくさんくべて家じゅうすつかり明るくしました。それから、わたしはお父さんをさがしに行くから、お前たちはうちに居てあの戸棚とだなにある粉こなを二人ですこしずつたべなさいと云つて、やつぱりよろよろ家を出て行きました。二人が泣いてあとから追つて行きますと、お母さんはふり向いて、

「何たらいうことをきかないこどもらだ。」と叱るしかように云いました。そしてまるで足早に、つまずきながら森へ入ってしまいました。二人は何べんも行ったりに来たりして、そこらを泣いて廻まわりました。とうとうこらえ切れなくなって、まっくらな森の中へ入って、いつかのホップの門のあたりや、湧水のあるあたりをあちこちうろろ歩きながら、お母さんを一晩呼びました。森の樹の間からは、星がちらちら何か云うようにひかり、鳥はたびたびおどろいたように暗やみの中を飛びましたけれども、どこからも人の声はしませんでした。とうとう二人はぼんやり家へ帰って中へはいりますと、まるで死んだように睡ねむってしまいました。